

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02218

研究課題名(和文) 身心論の観点からみたアーラヤ識説の研究

研究課題名(英文) A Study of Alayavijnana from the Point of View of the Mind-Body Interrelationship

研究代表者

山部 能宜 (Yamabe, Nobuyoshi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40222377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、以下の5分野に大別できる。

(1) アーラヤ識説に関する文献学的研究。最初期のアーラヤ識説が、禅定における身心相関の直観的把握を前提としていたことを論じた。(2) アーラヤ識説と密接に関係する種子説の発展に関する研究。この分野では、種子説の同時因果・異時因果の問題、種姓説、種子説の発展における「分別」の役割等を検討した。(3) 禅定中における身心関係の検討の一環として、深い禅定中の五識のはたらきを検討した。(4) 種子説を検討する一環として、『成唯識論』に説かれる種子の本有・新熏をめぐる異説の背景を検討した。(5) 成果を広く共有するため、異分野の研究者との連携を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

瑜伽行派のアーラヤ識説は、一種の深層心理学として理解されることが多く、また無我輪廻を説明するための理論的要請とされたり、唯心説を成り立たせるために必要な種子説の基盤とされるなど、心理的・教理的側面から考察されることが一般的であったように思われる。一方、瑜伽行派の理論の背景に禅定の実践があるということは以前から言われてきたことであるが、その具体的な根拠は必ずしも明確にされていなかったように思われる。今回の研究では、文献資料に基づき、身心相関の要としてのアーラヤ識の役割を明確化することに努めた。そして、その成果を仏教学者のみならず心理学等の研究者・実践者とも共有し、広く社会に還元することを試みた。

研究成果の概要(英文)：The achievements of this project can be classified into the following five areas.

(1) Textual study of alayavijnana. At the earliest stage, alayavijnana was based on intuitive penetration into the mind-body interrelationship in meditational transformation. (2) Research on the bija theory, which is closely tied to alayavijnana. I have discussed the issues of the simultaneous and successive causality, the gotra theory, the position of "conceptuality" in the development of the bija/vasana theory. (3) To shed light on an aspect of the mind-body relationship during meditation, I have discussed the operation of the five senses in deep meditation. (4) As part of the research into the bija theory, I have examined the background of the controversy over the origination of bija in the Cheng weishi lun. (5) To share the findings of my research with those who are not specialized in Buddhist Studies, I have exchanged ideas with researchers and practitioners in Western philosophy and psychology.

研究分野：仏教学

キーワード：アーラヤ識 瑜伽行派 身心相関 禅定 転依 種子 『瑜伽師地論』 『成唯識論』

1. 研究開始当初の背景

「アーラヤ識」とは、表層の心の基層で常にはたらき、衆生の過去の経験の記録をすべて保持するとともに現在・未来の心象世界を生み出すとされるある種の深層識である。これはインド大乘仏教の主要な学派のひとつである瑜伽行唯識学派によって創唱された教理概念であって、それ以前の学派にはみられない。そのため、この説が導入された背景をめぐっては、これまでも研究者によって様々な議論が展開されてきた。

そのなかで、現段階でもっとも注目に値するのは1987年に Lambert Schmithausen が公刊した専著 *Ālayavijñāna* である。そのなかで彼は、アーラヤ識説は根本説一切有部が伝持した『法施比丘尼経』における滅尽定に関する一節（「滅尽定において…識は身体を離れない」）をめぐり聖典解釈学的考察のなかで導入されたものであるという仮説を提唱した。その議論は博引旁証を尽くした精緻なものであり、それ以降のアーラヤ識研究に大きな影響を及ぼしている。Schmithausen の議論を踏まえたその後のアーラヤ識研本研究として重要なものに、William Waldron (2003)、松本史朗 (2004)、Haltmut Buescher (2008) によるものがあり、三者三様の立場から自説を展開している。Schmithausen は、これらに対して2014年に弘瀚な文献学的答論 *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda* を発表し、特に松本と Buescher に対する詳細な反論を展開したほか、拙論に関しても若干のコメントを加えている。

一方私は、禅定の実践における身心の不自由な状態（庵重）から自由な状態（軽安）への転換が、身心の生理的基盤としてのアーラヤ識の転換により可能となるという、身心の密接な相関関係の自覚からアーラヤ識は見出されたのではないかという仮説をもっており、近年この仮説を検証する作業を進めている。

2012年の『シリーズ大乘仏教 唯識と瑜伽行』への寄稿「アーラヤ識論」においては、この観点から、アーラヤ識説は恒常的な自己存在の存在を認めない仏教徒が、輪廻における連続性を説明するために導入した純粋に理論的な仮構であったという Paul Griffiths の理解 (*On Being Mindless*, 1986) を批判的に検討した上で、Schmithausen の *Ālayavijñāna* を参照しつつ自らの仮説を提唱した。

また香港大学で2013年に行われたシンポジウムでは、先の「アーラヤ識論」を踏まえて改めて Griffiths の議論の問題点をより詳細に指摘した。この論文は、2015年に香港で公刊されている。

さらに2014年にウィーン大学で開かれた国際仏教学会第17回大会では、Robert Kritzer とともに「瑜伽行派における実践と教理」と題するパネルを組織し、Martin Delhey や Robert Sharf といった第一線の研究者とともにこの課題に関する国際的な議論を促進することに努めた。申請者自身は、禅定における身心相関とアーラヤ識説との密接な関係を改めて詳細に論じた。この発表は私の斯分野の研究におけるその後の展開の一つの起点となったように思われる。

そのような展開の一つが、2015年ミュンヘン大学で行われたシンポジウム「さまざまな状況における瑜伽行派教学」であった。このシンポジウムで、申請者は Schmithausen 教授と並んで基調講演を担当し、改めて自説を展開したのみならず、*Genesis* における申請者へのコメントへの答論を提示した。

国際仏教学会での発表をふまえた展開のもう一つが、2015年12月にウィーン大学で開催

された仏教の修行道に関するシンポジウムである。本シンポジウムはインド仏教における修行道を総合的に検討する大規模なもので、各方面の研究者と有意義な議論を交わすことができた。

ここまでこの件に関する成果発表は海外で行ったものが多かったのであるが、2015年から2016年にかけて二篇の日本語論文を『東洋の思想と宗教』と『インド論理学研究』に寄稿し、国内で私見の詳細を発表した。また2016年9月には関係する口頭発表を日本仏教学会で行い、日本の研究者からフィードバックを頂く機会を得た。

このように、申請段階で私にはこの方面に関してはかなりの研究の蓄積があり、これを踏まえてさらに研究を深化させたいと考えていた。

2. 研究の目的

唯識瑜伽行派が衆生の最深層の基盤として提示した独自の概念であるアーラヤ識説の導入と展開のプロセスを、禅定の実践における心身の相関関係(安危同一)の観点から詳細に考察する。従来アーラヤ識説は一種の深層心理と見なされ、心理的観点からアプローチされることが多く、身体との関係性については一部を除き殆ど注目されていなかったように思われる。しかし、アーラヤ識と身体との関係は、瑜伽行派研究上極めて重要であり、このような観点からアーラヤ識説理解の根本的再検討を試みる。

アーラヤ識は表層識および身体の状態と密接な連関関係にあり、このような身心とアーラヤ識との関係は、禅定による身心の転換に関して重要な位置を占めると思われる。アーラヤ識は身心双方の種子を保つことによって身心の状態を決定づけるのだから、アーラヤ識説の解明には、種子(およびそれと密接に係る種姓)説の解明が不可欠の前提となる。また、当然のことながら教理史の研究は文献史の研究に支えられていなければならない。従って、文献史研究をベースとしつつアーラヤ識・種子・種姓・安危同一といった概念の展開の研究を指向する。また、これらの諸概念の前史及び後世の展開も、必要に応じて視野に入れる。

3. 研究の方法

これまでの研究をふまえつつ、瑜伽行派でアーラヤ識に言及する文献のうち、まだ十分研究できていないものの検討を進め、その成果をふまえて、アーラヤ識説の導入と展開のプロセスを、実践的文脈に着目しつつ詳細に考察する。あわせて、アーラヤ識に保持され実践と転換の根拠となる種子・種姓といった概念の再検討も進める。文献の記載によれば、種子・種姓とは、我々のなかにある何らかの粒子を指すのではなく、身心の総体のある種の状態を指すものだと言われるから、それ自体が身心相関と密接に係る概念である。そのような点に留意しつつ研究を進める。

4. 研究成果

本研究は、本来は2017年度か2017年度から2019年度の3カ年間の予定であったが、新型コロナウイルス感染症蔓延の影響により2カ年間の延長を行い、結果的には2017年度から2022年度までの5カ年間の研究となった。この間の成果は、以下の5分野に大別できる。(1)アーラヤ識説に関する文献学的研究。最初期のアーラヤ識説が、禅定における身心相関の直観的把握を前提としていたことを、主として『瑜伽師地論』における記述をふまえつつ論じた。この方面の成果としては、『日本仏教学会年報』(2017) \ *Journal of Indian Philosophy*

(2018)、『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』(2019)および *Mārga: Paths to Liberation in South Asian Buddhist Traditions* (2020) に掲載された諸論文が挙げられる。これらはそれぞれ力点を異にするものの、いずれもアーヤ識が過去の経験を蓄積し、その結果として我々の認識世界を展開させる表層心の基盤としての機能をもつのみならず、同時に身体生命活動を維持する生理的基盤としての機能ももっていることに着目し、禅定の修行を通して身心の双方がそれぞれ麤重の状態から軽安の状態に転換するという行者の体験を通して、身心相関の要として人間の最深層ではたらいっているアーヤ識が見出されたのではないかという私見を、さらに発展させつつ詳細に論じたものである。

(2) アーヤ識説と密接に関係する種子説の発展に関する研究。瑜伽行派では種子はすべてアーヤ識が保持するとされるから、種子説はアーヤ識説と不可分のものであり、またアーヤ識に関する既発表の論文で論じた通り、種子は有情の身体の状態と密接に関連するから、身心論とも密接に関係する概念と言える。この分野では、*Śrāvakabhūmi and Buddhist Manuscripts* (2017) や『駒澤大学禅研究所年報』(2020) に発表した論文において、元來異時因果をベースとしていたと思われる瑜伽行派の種子説に、アーヤ識説の導入にともない同時因果説が導入された経緯を論じた。また、最初期瑜伽行派文献で「種子」と極めて近い位置にある「種姓」(gotra)の記述に現れる重要ターム prakṛti および dharmatā の分析を通して、松本史朗教授の「Dhatu-vāda」論の再検討を行なう論文を、*Critical Review for Buddhist Studies*(2017)に発表したほか、瑜伽行派の種子論の発展において概念構想が果たした役割について検討する論文を Dhammajoti 記念論文集に発表した。後者の大綱は以前邦文で発表した拙稿に沿ったものであり、日本語を解する海外の一部の研究者からは既に参照されていたのであるが、その後の自他の研究の進展をふまえ、海外のより多くの研究者の便宜も考えて、新たに英文で発表した。瑜伽行派初期における種子説は「界」「種姓」の概念と密接に関係するもので、衆生に本来的に存在する善悪一切の可能性を指すものであったが、後に瑜伽行派の教理体系が大乗化するにともない、輪廻の根拠として概念構想(「分別」)が重視されるようになり、そのような概念構想が残す潜在余力(「習気」)が一切の現象を生み出す「種子」と考えられるようになって、「習気」と「種子」の一体化は完成したのであろう。そのようなプロセスを経る以前から、「種子」と「習気」が同一視されていた訳ではないのである。

(3) 禅定中における身心関係を解明するための一助として、深い禅定中には五識がはたらないという、仏典に広く見られる記述が、実際の体験に基づいているかどうかを検討し、アメリカ宗教学会(2019)で発表した。本研究に関してはまだ論文化していないため、今後の公刊を目指したい。

(4) 種子説を検討する一環として、『成唯識論』に説かれる種子の本有・新熏をめぐる異説の列挙が、一般的に信じられているように玄奘が編纂したものと考えてよいのか否かを検討し、『從長安到那爛陀』(2020)および *From Chang'an to Nālandā* (2020) に発表した。『成唯識論』における種子の本有・新熏をめぐる議論に類似する議論が、チベット語訳で現存する『撰大乘論分別秘義釈』および『瑜伽師地論釈』に見られることから、『成唯識論』が同一の問題に対する異説を列挙して議論するのは、同論が「十師糶訳」の結果であることを示すのではなく、むしろそれが後期瑜伽行派の論書に一般的な形態であったことを示す可能性を指摘した。この研究も、以前邦文で発表した拙稿を前提としているが、その後の研究成果をふまえて、中・英二カ国語で改めて発表したものである。

(5) その他、学際的連携や、研究成果の社会への還元の可能性を摸索して、関係の研究会で

幾つかの発表を行った。特に、心理学の研究者・実践者に対して講演する機会を得たことは、今後の連携につながりうるものであったように思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山部能宜	4. 巻 特別号
2. 論文標題 『成唯識論』における種子の継時的因果説・同時的因果説の問題について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駒澤大学禅研究所年報	6. 最初と最後の頁 349-377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山部能宜	4. 巻 52
2. 論文標題 <公開講演> アーラヤ識説と禅定実践の関係について 特に身心論の問題に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駒澤大学大学院仏教学研究會年報	6. 最初と最後の頁 (1)-(37)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamabe, Nobuyoshi	4. 巻 1
2. 論文標題 On Bijasraya: Successive Causality and Simultaneous Causality	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Sravakabhumi and Buddhist Manuscripts	6. 最初と最後の頁 9-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamabe, Nobuyoshi	4. 巻 21
2. 論文標題 Once Again on "Dhatu-vada."	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Critical Review for Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 9-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山部能宜	4. 巻 82
2. 論文標題 身心論の観点からみた瑜伽行派の人間観 アーラヤ識説を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本佛教学會年報	6. 最初と最後の頁 165-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamabe, Nobuyoshi	4. 巻 46
2. 論文標題 Arayavijnana from a Practical Point of View	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Indian Philosophy	6. 最初と最後の頁 283-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10781-018-9347-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 7件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 山部能宜
2. 発表標題 身心相関の観点からみた禅定の実践 -アーラヤ識説をてがかりに-
3. 学会等名 日本ソマティック心理学協会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山部能宜
2. 発表標題 禅定実践中的阿頼耶識 (Alayavijnana) の意義
3. 学会等名 第五屆東方唯識学年会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nobuyoshi Yamabe
2. 発表標題 Do Sense Perceptions Operate in Deep Meditation?: An Examination of a Passage on Meditative Experience in Cheng weishi lun
3. 学会等名 American Academy of Religion (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nobuyoshi Yamabe
2. 発表標題 Alayavijnana and the Mind-Body Correlation
3. 学会等名 Dr. P. V. Bapat Memorial Lecture
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山部能宜
2. 発表標題 《成唯識論》” 糶訊 ” 的仮説性再探
3. 学会等名 玄奘与絲路文化国際研討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nobuyoshi Yamabe
2. 発表標題 The Development of the Yogacara Bija Theory: Bija, Dhatu, Gotra, Vasana, and Conceptualization
3. 学会等名 Centre for South and South-East Asian Studies, University of Naples "L'Orientale" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山部能宜
2. 発表標題 『成唯識論』における種子依の異時因果・同時因果の問題について
3. 学会等名 スタンレー・ワインスタイン教授追悼国際シンポジウムー東アジア仏教研究のあけぼの（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山部能宜
2. 発表標題 アーヤ識説と禅定実践の関係についてー特に身心論の問題に着目してー
3. 学会等名 駒沢大学大学院仏教学研究會主催公開講演會（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamabe, Nobuyoshi
2. 発表標題 Successive Causality and Simultaneous Causality in the Yogacara Theory of Bija
3. 学会等名 SOAS Buddhist Forum（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Toshiichi Endo, Bhikkhu Analayo, Bhikkhuni Dhammadinna, Vincent Eltschinger, Eli Franco, Lambert Schmithausen, Nobuyoshi Yamabe, et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Centre of Buddhist Studies, The University of Hong Kong	5. 総ページ数 496
3. 書名 Illuminating the Dharma: Buddhist Studies in Honour of Venerable Professor KL Dhammajoti	

1. 著者名 Rupert Gethin, Naomi Appleton, Vincent Eltschinger, Vincent Tournier, Nobuyoshi Yamabe, Deniel M. Stuart, Malcolm David Eckel, Jowita Kramer, Peter-Daniel Szanto, Anna Filigenzi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Austrian Academy of Sciences Press	5. 総ページ数 426
3. 書名 Marga: Paths to Liberation in South Asian Buddhist Traditions	

1. 著者名 Shi Ciguang 釋慈光, Yamabe Nobuyoshi 山部能宜, Ernest Billings (Billy) Brewster, Li Zijie 李子捷, Dan Lusthaus, Richard D. McBride II, Shigeki Moro 師茂樹, Jeffrey Kotyk, Guo Wu 伍國, Max Deeg, Arun Kumar Yadav, Yu Xin 余欣, George A. Keyworth, Siglinde Dietz	4. 発行年 2020年
2. 出版社 World Scholastic Publishers	5. 総ページ数 525
3. 書名 From Chang'an to Nalanda: The Life and Legacy of the Chinese Buddhist Monk Xuanzang (602?-664)	

1. 著者名 陳金華, 釋慈光, 山部能宜, 白立冰, 吳蔚琳, 長谷川岳史, 王邦維, 張 [女+亭], 王欣, 小峯和明, 陳明, 高陽, 伍國, 于碩, 張利明, 曹彥, 李子捷, 林佩瑩, 薛克翹, 劉林魁, 楊劍霄, 坂井田夕起子, 余欣, 紀贊, 邱蔚華, 王翔, 袁 [火+韋], 李海波	4. 発行年 2020年
2. 出版社 World Scholastic Publishers	5. 総ページ数 649
3. 書名 從長安到那爛陀：玄奘（600？-664）的生平與遺產	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------